

千島列島における人類活動史の考古学的総合研究（Ⅱ）

—特に北方四島の先史文化研究を中心に—

右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ, V. M.

Key Words

縄文文化期 (Jomon culture period)、続縄文文化期 (Zoku-Jomon culture period)、擦文文化期 (Satsumon culture period)、オホーツク文化期 (Okhotsk culture period)、アイヌ文化期 (Ainu culture period)、史跡 (Historic site)

1 はじめに

北海道からカムチャツカをつなぐ千島列島は、旧石器文化からはじまり、アイヌ文化に至るまでの人類活動史について空白の研究領域であり、基礎的なデータが欠落している地域である。しかも、北海道の先史文化あるいはアイヌ文化の研究にとって、東の千島ルートは北のサハリンルートと同様に北海道で異文化の交差・接触を明らかにできる要素をもっている。そこには、歴史的な画期や文化的な変容、過去の自然環境の変遷、自然資源の活用史など、千島列島における歴史・文化の解明につながる基礎的研究の推進が重要となってくる。

千島列島を含めた北方四島の研究は、「北方文化共同研究事業」の一環として、2005年（平成17）～2009年（平成21）にかけて本格的に取り組むこととした。右代・鈴木ほか（2008、2010）は、この研究で歴史・文化資源の活用の可能性を探ることを目的に国後島古釜布郷土博物館の収蔵資料を中心とする先史文化の遺跡群の時代性と文化遺産の活用について明らかにしてきた。さらに、そこで北海道や北方四島の先史文化資源をつうじた文化交流や歴史教育の推進、観光資源への活用など様々な展開が期待できることを指摘した。このことを実現するためには、遺跡や史跡などの埋蔵文化財の基礎的研究が必要であり、人類が遺した文化遺産を調査し、時代、種類、規模などを記録することや歴史認識をロシア側の研究者と共通のものにすることが求められる。そこには、北方四島の領土問題をこえる地域史や民族学的研究はもとより、日本史や世界史にまで展開できる重要な文化遺産が存在するからである。

この研究成果を踏まえ、2010年（平成22）～2013年（平成25）まで「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり」として研究プロジェクトを立上げ実施してきた。また、外部資金として科学研究費補助金（基盤

研究B）「千島列島における先史文化の考古学的基礎研究-特に北方四島を中心に-」（研究代表者：右代啓視）、科学研究費助成基金助成金（基盤研究C）「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」（研究代表者：鈴木琢也）などを使用し実施してきた。右代・鈴木ほか（2011、2012、2013、2014、2015）は、この研究プロジェクトを中心に北方四島における先史文化の基礎データの収集のため、国後島と色丹島での遺跡調査と、国後島古釜布郷土博物館を拠点とする北方四島の郷土史、民族学、民俗学、歴史学などの専門家との学術交流を進めた。この研究成果として、第一に、国後島、色丹島の現地調査により遺跡の分布やその特性などの基礎データを収集することができた。国後島では65カ所、色丹島では22カ所の遺跡を確認した。これは戦後はじめての大きな成果であり、両島の未調査地域を調査することで、さらに遺跡数が増えることを指摘してきた。また、千島アイヌに関する現地調査や国内調査を実施し、特に千島アイヌの特徴的な民族資料として、国内に現存する植物製民具であるテンキを集成し、基礎的なデータを報告した。第二に、学術的な交流をつうじ、文化遺産の重要性、歴史認識など両地域間の博物館交流を積極的に進めてきた。この内容は北方四島の専門家との共通課題として、北海道と北方四島の「歴史・文化・自然環境の活用」をテーマに、文化財保護、史跡・遺跡、博物館などの調査をつうじ、博物館の運営や経営、持続可能な管理体制、文化財保護の実態、先史文化を含む北海道史など多くの情報を提供し、将来に向けた両地域の歴史・文化活動について議論してきた。特に、アイヌ民族の歴史・文化については、北海道の各地域の博物館に収蔵されている民族資料や有形・無形文化財の保存・保護の状況、または伝承活動の状況などを共同で調査した。この学術交流をつうじ、歴史・文化の認識、文化財保護の思想、博物館の資料管理、展示手法、教育普及活動などの運営

や経営など、共通する多くの視点が持てたことが最大の成果である。例えば、北方四島と知床半島の歴史・文化・自然などは共通する環境にあることから、人類が共有しなければならない文化遺産がこの地域、または千島列島全域に存在することなどの認識がもてた。さらに、2010年（平成22）から遺跡や史跡を活用した文化財保護と歴史学習として、国後島の小学生が遺跡の草刈りを行い、現地で先史文化の歴史学習などが実施されるようになった。このように、学術交流で得た成果が学校教育や社会教育の現場で積極的に運用されるようになった。

このように、北方四島では様々な制限があるなか研究成果を着実にあげてきた。さらに研究を発展させるため、新たに「北方四島の考古学研究」とした総合研究プロジェクトを立上げ、2015年（平成27）から4カ年の計画で本研究を実施することとした。本研究は、北方四島を含めた千島列島の人類活動史を総合的に明らかにすることを大きな視座として、特に北方四島の先史文化を同島の研究者と共同研究することで共通の認識をもつことが第一の目的である。第二に、この研究プロジェクトをつうじ学術交流を進め、両地域の博物館交流や歴史認識をさらに深め、学術交流の友好関係を進展させることを目指すものである。

ここでは、2016年（平成28）に実施した北方四島の第Ⅱ次学術調査と調査で得た資料の分析について、考察を加え報告するとともに、北方四島の専門家を招聘して実施した学術交流について報告する。

2 北方四島の遺跡調査

北方四島での考古学的調査は、2005年（平成17）～2014年（平成26）にかけて継続的に研究を進めてきた。これまでの北方四島の考古学的調査は、右代・鈴木ほか（2008、2010、2011、2012、2013、2014、2015）で、その成果を報告してきたところである。そのなかで千島アイヌのテンキの物質文化的な研究では、アリュシャン列島、さらには北米大陸との文化的な交流、民族的な接触で成立する可能性を指摘してきた。さらに、右代（2014a、2014b）は、千島列島に北方四島を含めた先史文化について、国後島と色丹島の先史文化をみると連綿と文化が築かれていたわけではなく、後期旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化と、その文化のなかでも限られた時期にしか遺跡が存在しないことを総括的に指摘した。また、北方四島には、カムチャツカ半島地域の物質文化の影響を受けた遺物がみられることを指摘するとともに、確実に中部千島までは縄文文化晩期、続縄文文化の遺跡が存在すること、さらにオホーツク文化は北千島まで拡がりをもつこと、アイヌ

文化はこの地域に特徴的にみられる内耳土器がカムチャツカ半島南部まで拡がりをもつこと、チャシ・コツは北千島まで拡がりをもつことを指摘してきた。さらに、鈴木（2011、2016a、2016b）は、これまで実施してきた北方四島の学術データを基に古代・中世にかけての北方交易のルートを明らかにしてきた。

これらの研究成果を基に、新たに進める本研究の北方四島の現地調査は、これまでと同様に内閣府、外務省をはじめ、北方四島交流北海道推進委員会などとの協力、連携をはかり「ビザなし交流・専門家交流事業」の枠組みのなかで実施することとした。特に、北方四島の国後島、色丹島の未調査地域、未調査の択捉島、歯舞群島の調査を積極的に取組むこととし、4カ年の現地調査を実施することとした。

2015年（平成27）の第Ⅰ次学術調査の成果は、国後島中部太平洋側海岸域で、新たに縄文文化期、続縄文文化期、擦文文化期の6カ所の遺跡を明らかにした。さらに、北方四島には黒曜石の産地がないため、遺跡から採集した試料の産地推定の分析を行い黒曜石の流通ルートについて検討を行った。方法は、黒曜石の北海道産、カムチャツカ産のデータと北方四島の遺跡から採集した黒曜石データを比較分析し、このデータで流通ルートを検討した。この結果、国後島と色丹島の石器類は、北海道の白滝産、置戸産に限られた黒曜石を素材として利用していたことを明らかにした（右代・鈴木ほか 2016）。学術交流の調査では、北海道博物館をはじめ小樽、余市の博物館、史跡・文化財、歴史・文化などの調査を実施した。

ここに報告する第Ⅱ次学術調査は、北海道博物館の2016年（平成28）の研究プロジェクトとして、択捉島と国後島の調査を実施したものである。択捉島の調査は、戦後はじめての学術調査であり、5月27日～5月30日にかけて、オホーツク海側の別飛と紗那、ナヨカの地域で実施した。国後島は、9月15日～9月19日にかけて、国後島中部太平洋側の未調査地域と古釜布大岬の海岸で発見された岩面刻画の調査を実施した。

この調査で新たに発見した遺跡は、次のとおりである（図1、図3、表1、表2・3）。

（1）択捉島の遺跡調査

択捉島は千島列島の中でも最大の島で国後島の東部に位置し、全長は約214km、面積は約3,166km²で、北東から南西に細長い島である。国後島と択捉島の間には国後水道、ウルップ島と択捉島の間には択捉海峡がある。

この島の湖沼は火口湖と海跡湖がみられ、主な湖沼は北東から薬取沼（1.02km²）、トウロ沼（1.31km²）、瀬石沼、紗那沼（2.71km²）、留別沼、ラウス沼（1.41km²）、年萌湖（4.25km²）、キモン沼、ポン沼、レブン沼、ヤ

ンケ沼、キモンマ沼(1.45km²)、内保沼(2.56km²)、得茂別湖(5.71km²)である。

このように水資源は豊富であり、河川も発達している。主な河川は北東から茂世路川、比良糸川、薬取川、平石別川、戸坂別川、尾渡川、別様川、温泉川、中川、アンコロ川、ナヨカ川、紗那川、有萌川、振別川、内保川、ラウス川、留別川、老門川、年萌川、伏古川、黒木内川、恩根別川、ウエンベツ川、丁寧川、オワタリ川、ポロポロ川、白イ川、具谷川、中川、野塚川、ベウンベツ川、内保川、オフイベツ川、得茂別川、ユウガウシ川があり、沢地形も多く発達している。

また、択捉島は千島列島を構成する火山地帯の一部であり、北東から神威岳(標高:1,323m)、ラッキベツ岳(標高:1,200m)、茂世路岳(標高:1,124m)、硫黄岳(標高:981m)、焼山(標高:562.3m)、背卸山(標高:564.5m)、長根山(標高:485.2m)、御陪聳山(標高:515m)、天幕山(標高:592m)、岩山(標高:712m)、薬取岳(標高:852.4m)、木曾谷山(標高:648m)、乙今牛山(標高:796.5m)、ホロス山(標高:465.8m)、留茶留山(標高:437m)、北散布山(標高:1,561.1m)、散布山(標高:1,587.3m)、小登山(標高:351.1m)、指白山(標高:1,128m)、三角山(標高:545m)、大山(標高:781.8m)、丸山(標高:720m)、摺鉢山(標高:634m)、小田萌山(標高:1,208m)、烏帽子・焼山(標高:1,147m)、本登山(標高:953m)、ポンノポリ山(標高:481m)、年萌大山(標高:720m)、年萌丸山(標高:385m)、恩根登山(標高:1,422m)、恩根丸山(標高:866.9m)、阿登左岳(標高:1,209m)、単冠山(標高:1,634m・連山)、西単冠山(標高:1,629m)、クマネシリ山(標高:671.6m)、オンアネノポリ山(標高:743.8m)、六甲山(標高:770.7m)、ベルタルベ山(標高:1,221m)などの山岳が発達している。

海域では、千島海流(寒流)と日本海流(暖流)がぶつかりあうことから、サケ、マス、タラ、ハナサキガニ、タラバガニなどの海洋資源が豊富で、江戸時代末からニシン、サケ、マス漁の漁場がひらかれていたことが知られている。また、クジラをはじめとするトドやオットセイ、アザラシ、ラッコなどの海獣類も多く生息している。

このように自然環境が豊かな島であり、現在の択捉島にはロシア人約6,000人が居住し、島の中心は紗那に置かれ、ウルップ島を含めサハリン州クリル地区行政府の管轄下におかれている。また、紗那の南部と北東部は、自然保護地区に指定されている。近年、紗那の地域は、2007年(平成19)からはじまった「クリル諸島社会経済発展連邦特別プログラム」である新クリル発展計画で文化施設や住宅、インフラの整備が進められ、学校、幼稚園、病院、文化会館(図書館、博物館、体育館、プー

ル、映画・コンサートホールなどからなる総合的な施設)が新築された。また、インフラでは、道路、港湾、空港などの産業基盤の整備が進んでいる。この新クリル発展計画にともない、遺跡が破壊されたものや行政発掘調査も実施されている。島の遺跡は、自然保護地区が設定されていることから遺跡全体の保存状態が良く、これまで発見されていない遺跡も多く存在する。

本調査は、択捉島紗那郷土博物館ヴィノグラドヴァ、V.M.学芸員と択捉島紗那図書館エフチュシェンコ、N.I.館長と共同で、択捉島中部オホーツク海側の別飛とナヨカの地域で実施した(図1-1、図2、表1)。

①別飛温泉川左岸河口1遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する標高約4~5mの砂丘上に位置し、遺跡は温泉川の左岸上にある(図1-1、図2、表1-1、写真1-1)。遺跡の位置は、北緯45°15'49"、東経148°02'20"である。ここでは、インフラ整備にともなう砂丘からの砂取りで遺跡が破壊され、遺物が散乱した状態で確認できる(図2)。ここから土器12点、フレーク1点を採集したが、遺構は確認できなかった。遺跡の性格は遺物包蔵地であるが、かつて竪穴住居址があった可能性がある。遺跡の時期は、採集遺物から縄文文化とオホーツク文化の時期と考えられる。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図7-1~7に示した(写真4-1~7)。図7-1は、縄文文化の下田ノ沢2式土器で深鉢の胴部片である(写真4-1)。図7-2~7は、オホーツク式土器で甕の胴部片である(写真4-2~7)。このオホーツク式土器片は短刻文が主体に施されもので、その特徴から右代編年のオホーツク文化後期の7世紀中~8世紀中(Ⅱ-a期)に位置づけられる(右代1991)。

②別飛温泉川左岸河口2遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する標高約7~8mの砂丘上に位置し、遺跡は温泉川の左岸上にある(図1-2、図2、表1-2、写真1-2)。遺跡の位置は、北緯45°15'52"、東経148°02'10"である。遺跡は現在の別飛住宅街の南側縁辺であり、住宅街の道路で遺跡が破壊され、遺物が散乱した状態で確認できる(図2)。ここから土器56点、フレーク5点を採集したが、遺構は確認できなかった。遺跡の性格は遺物包蔵地であるが、道路や住宅で竪穴住居址が破壊された可能性がある。時期は、採集遺物から縄文文化(後半)とオホーツク文化(前期後半から後期)、擦文文化(トビニタイ)の時期と考えられる。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図7-8~16、図8、図9に示したものである(写真4-8~32、写真5-1~16)。図7-8~10は、縄文

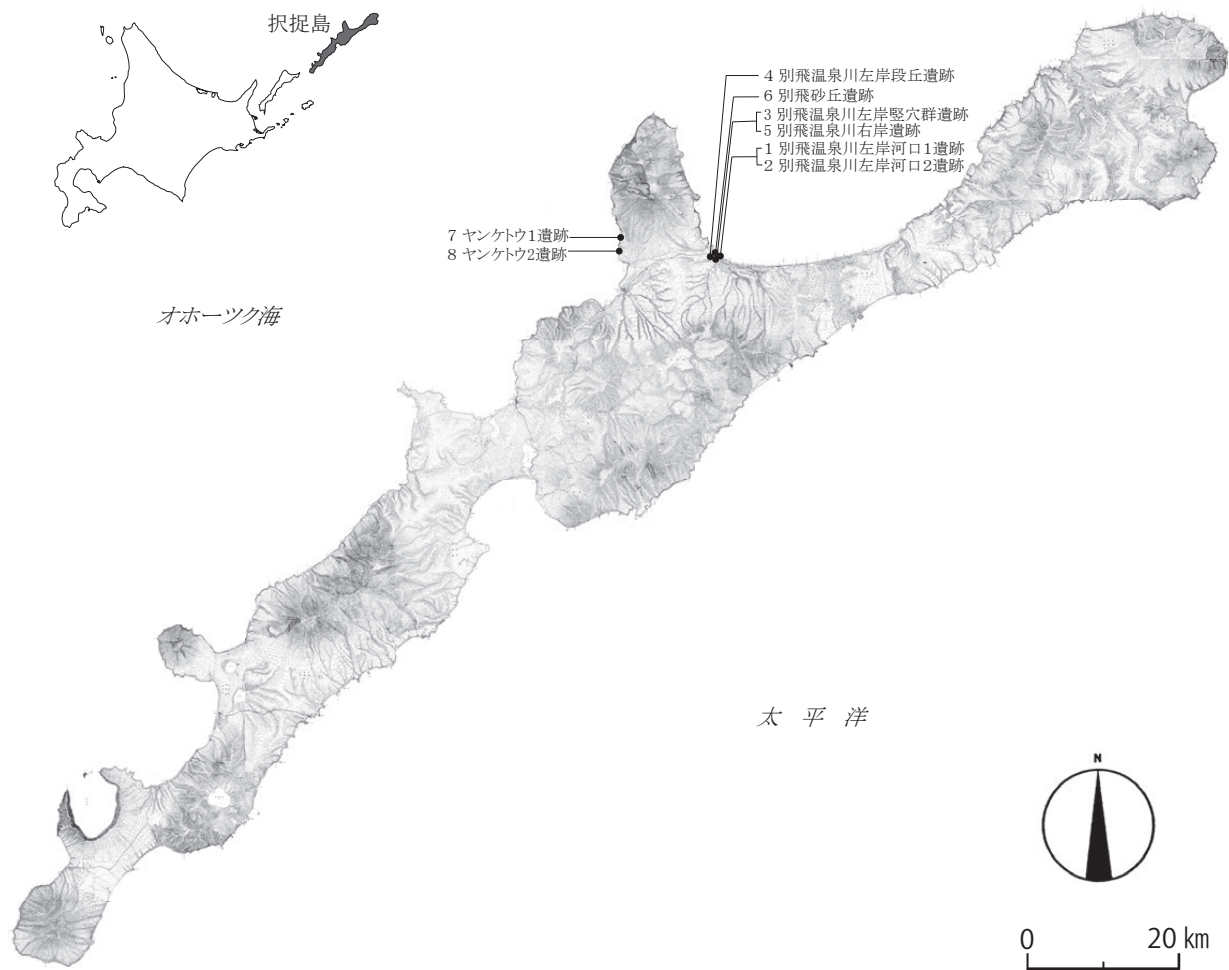


図1 択捉島の遺跡分布（国土地理院、数値地図50,000（地図画像）、北方四島の一部を使用）

文文化の後北C₂・D式土器で深鉢の口縁部片と胴部片である（写真4-8～10）。この土器片の時期は、3～4世紀に位置づけられる。

図7-11～16、図8、図9-1～3は、オホーツク式土器である（写真4-11～32、写真5-1～3）。図7-11は、口縁部片で爪形文が施され肥厚帯を有する（写真4-11）。図7-12は、胴部片で櫛目文が施されている（写真4-12）。これらの特徴から右代編年のオホーツク文化前期の7世紀ころ（Ⅰ-b期）に位置づけられる。図7-13は、胴部片で沈線文と刻文の複合文が施され、右代編年のオホーツク文化前期の8～9世紀初頭（Ⅰ-c期）に位置づけられる（写真4-13）。図7-14～16と図8-1～3は、口縁部片と胴部片で短刻文を主体とし、この特徴から右代編年のオホーツク文化後期の7世紀中～8世紀中（Ⅱ-a期）に位置づけられる（写真4-14～19）。図8-4・5は、口縁部片で貼付文と擬縄貼付文が施され、その特徴から右代編年のオホーツク文化後期の8世紀ころ（Ⅱ-b期）に位置づけられる（写真4-20・21）。図8-6～11は、口縁部片と胴部片で貼付文が施され、オホーツク文化後期の9世紀ころ（Ⅱ-c期）に位置づけられる（写真4-22～27）。

図8-12～16は無文の口縁部片で、土器の胎土や焼成の特徴からⅡ-c期末と考えられる（写真4-28～32）。また、図9-1～3の底部は、Ⅱ-b期～Ⅱ-c期に位置づけられるものである（写真5-1～3）。

図9-4～16は、トビニタイ土器の口縁部片と胴部片である（写真5-4～16）。図9-4～12は貼付文と擬縄貼付文が施され、貼付文が細く、断面が四角くなることなどから右代編年T-b期の10世紀中ころに位置づけられる（写真5-4～12）。図9-13～16は、貼付文と擦文土器にみられる鋸歯文がみられ、この特徴から右代編年T-d期の12世紀ころに位置づけられる（写真5-13～16）。

③別飛温泉川左岸竪穴群遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する海岸段丘、標高約10～12mの台地上に位置し、遺跡は温泉川に切られる台地上にある（図1-3、図2、表1-3、写真1-3）。遺跡の位置は、北緯45°15'32"、東経148°01'53"である。ここでは、竪穴住居址24軒を確認した（図2）。竪穴住居址の形状は円形とフライパン形である。円形の規模は、径約5～3.5mで、深さは約1～1.5mである。フライパン形の規模は、径約11～7mで、深さは

表1 択捉島の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文章創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文文化	オホーツク文化	アイヌ文化			
1	別飛温泉川左岸河口1遺跡								○	○		遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、石器類	2016年調査
2	別飛温泉川左岸河口2遺跡								○	○	○	遺物包蔵地	後北C2・D式土器、オホーツク式土器、トビニタイ土器、石器類	2016年調査
3	別飛温泉川左岸竪穴群遺跡								○			遺物包蔵地 (円形、フライパン形24)		2016年調査
4	別飛温泉川左岸段丘遺跡						○		○			遺物包蔵地 (円形、フライパン形7)	北筒式土器、下田ノ沢式土器、剥片(黒曜石)	2016年調査
5	別飛温泉川右岸遺跡								○			竪穴住居址		
6	別飛砂丘遺跡										○	墓	2014年に砂丘の崩れで人骨と墓標を確認。現地で埋葬。	2016年調査
7	ヤンケトウ1遺跡								○			竪穴住居址 (円形6)	続縄文土器、石器類	2016年調査
8	ヤンケトウ2遺跡			○								竪穴住居址 (円形7)	温根沼式土器、石器類	2016年調査

約1～1.5mである。時期は、竪穴住居址の形状から縄文文化～続縄文文化の時期と考えられる。遺物の採集は、できなかった。遺跡の性格は集落址であり、温泉川に沿って集落が発達し瀬石沼にいたる立地環境に位置している。

④別飛温泉川左岸段丘遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する海岸段丘、標高約40～50mの台地上に位置している（図1-4、図2、表1-4、写真1-4）。遺跡の位置は、北緯45°15'29"、東経148°01'18"である。ここでは、竪穴住居址7軒を確認した（図2）。竪穴住居址の形状は円形とフライパン形である。円形の規模は、径約5～4mで、深さは約1mである。フライパン形の規模は、径約7～6mで、深さは約1～1.5mである。時期は、竪穴住居址の形状や採集遺物から縄文文化（中期末～後期初頭）、続縄文文化（前半）の時期と考えられる。

この遺跡は、新たに道路を整備したことで竪穴住居址が破壊され、かつての竪穴住居址の数は現状より数軒多かったことが推測される。遺跡は道路整備により竪穴住居址が切られ、海側の道路露頭で2軒を確認することができた。この露頭から土器9点、石器2点を採集した。遺跡の性格は、集落址である。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図10-1～8に示したものである（写真5-17～24）。図10-1・2は、縄文文化中期末から後期初頭の北筒式土器の胴部片と底部片である（写真5-17・18）。

図10-3～8は、続縄文文化の下田ノ沢2式土器の口縁部片と胴部片である。この土器の時期は、続縄文文化前半の紀元前後ころに位置づけられる（写真5-19～24）。

2) 石器は、図10-9・10に示したものである（写真5-25・26）。図10-9は頁岩（Shale）製の石鏃である。計測値は、長さ2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.8g

である（写真5-25）。図10-10は頁岩製のナイフ（破損品）である。計測値は、長さ4.6cm、幅3.1cm、厚さ1.0cm、重さ13.5gである（写真5-26）。

⑤別飛温泉川右岸遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する海岸段丘、標高約10～12mの台地上に位置し、遺跡は温泉川に切られる台地上にある（図1-5、図2、表1-5、写真1-5）。遺跡の位置は、北緯45°15'24"、東経148°02'01"である。この遺跡は、温泉川をはさむ対岸に別飛温泉川左岸竪穴群遺跡がある（図2）。別飛に居住しているエフチュシェンコ館長によると、数は少ないが別飛温泉川左岸竪穴群遺跡と同様の竪穴住居址があるという。同遺跡には温泉川の増水のため渡れなかったが、温泉川の対岸側から数軒の竪穴住居址の窪みが確認できる。正確な竪穴住居址の軒数は確認できなかった。遺跡の時期は別飛温泉川左岸竪穴群遺跡と同様の縄文文化～続縄文

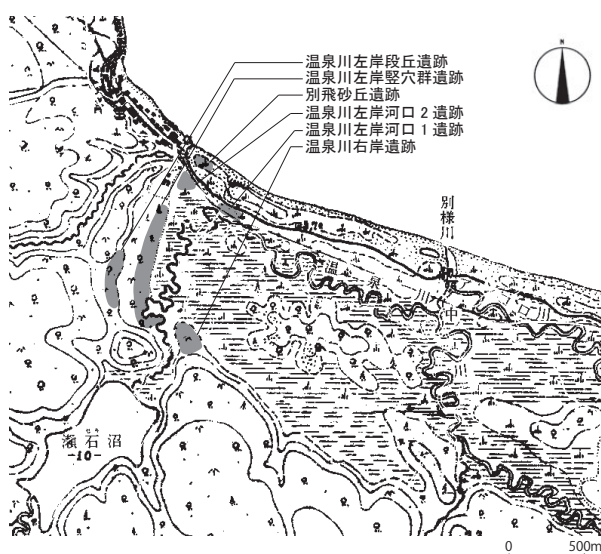


図2 択捉島別飛周辺の遺跡分布
(国土地理院、数値地図50,000 (地図画像) の択捉島別飛の一部を使用)

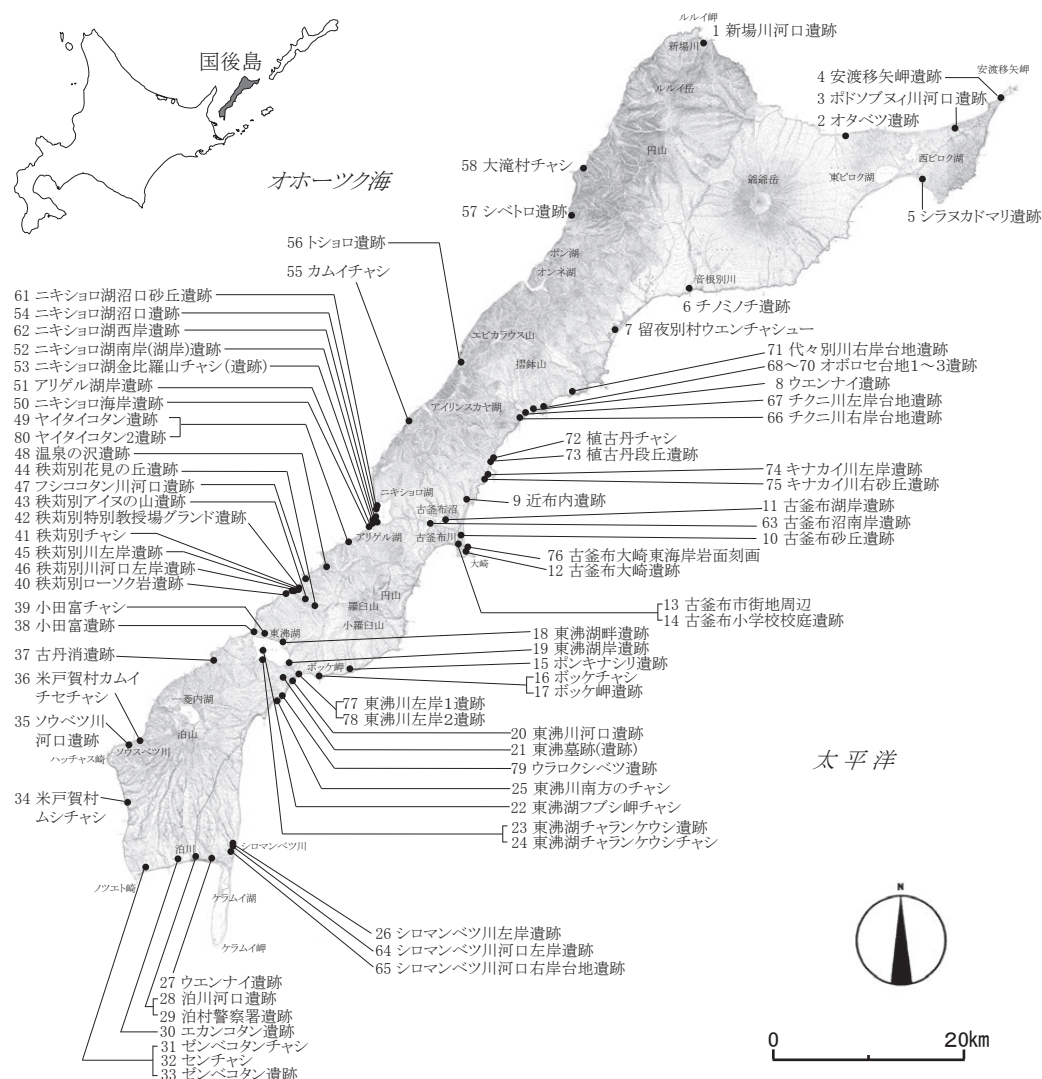


図3 国後島の遺跡分布

(59:マイアチヌイ川河口遺跡、60:ベスノイマイアチヌイ川河口遺跡は、遺跡の位置を未確認である。

国土地理院、数値地図50,000 (地図画像)、北方四島の一部を使用)

文化の時期と考えられる。遺跡の性格は、集落址と考えられる。

⑥別飛砂丘遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する標高約15~6mの砂丘上に位置し、遺跡は現在の街の中心、海に接する外側の砂丘上にある(図1-6、図2、表1-6、写真1-6)。遺跡の位置は、北緯45°16'01"、東経148°02'02"である。ここでは、インフラ整備にともなう砂取りで遺跡が破壊されものと考えられる。遺物の散布は確認できなかったものの、2014年に砂取りによる砂丘の崩れで人骨が発見され、木製の墓標が確認されている(図2-6)。人骨は現地の別の場所に埋葬したと、エフチウシェンコ館長から情報をえた。

遺跡の性格は墓域であり、時期はアイヌ文化の時期と考えられる。また、人骨が発見された砂丘は、標高約3mの砂層に厚さ5cmの火山灰層が確認でき、これより上

位の砂層は風性堆積であった。火山灰の噴出火山や年代は現在特定していないが、択捉島や国後島では18~19世紀にかけ火山活動が活発であったことから、今後も課題として明らかにしていきたい。

⑦ヤンケトウ1遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する海岸段丘、標高約25~30mの台地上に位置し、遺跡はナヨカから北へ約8kmにある(図1-7、表1-7、写真1-7)。遺跡の位置は、北緯45°17'39"、東経147°52'20"である。ここでは、竪穴住居址6軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形である。円形の規模は、径約5~3.5mで、深さは約1mである。時期は、採集遺物から続縄文文化の時期と考えられる。遺跡の性格は集落址であり、遺跡が位置する海岸段丘の北側に小河川があり立地環境としては良好である。遺跡に接する道路の露頭から土器5点を採集した。遺跡の性格は集落址である。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図11-1に示したものである(写真6-1)。この胴部片には、斜行縄文が施され、この特徴から縄文文化の時期に位置づけられる。

⑧ヤンケトウ2遺跡

この遺跡は、択捉島中部、オホーツク海側に発達する海岸段丘、標高約25~30mの台地上に位置し、遺跡はナヨカから北へ約5kmにある(図1-8、表1-8、写真1-8)。遺跡の位置は、北緯45°16'45"、東経147°52'15"である。ここでは、竪穴住居址7軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形である。円形の規模は、径約7~5mで、深さは約1~1.5mである。時期は、採集遺物や竪穴住居址の形状から縄文文化前期と考えられる。遺跡の性格は集落址である。遺跡周辺の道路や露頭から土器3点、石器5点を採集した。遺跡の時期は、採集した遺物から縄文文化前期に位置づけられる。

この遺跡では、2014年(平成26)にサハリン州で遺跡保護のため、1軒の竪穴住居址を発掘している。同遺跡の内陸500mに砂利工場が建設され、この遺跡周辺の岩石を採取し加工する骨材生産が進められていることが発掘の原因となったものと考えられる。これは「新クリル発展計画」に関連するものと考えられ、この事業にともなう遺跡破壊は今後も続くものと考えられる。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図11-2・3に示したものである(写真6-2・3)。この土器は、縄文文化前期の温根沼式土器と考えられる胴部片で、土器の胎土に植物性繊維を含む特徴がみられる。

2) 石器は、図11-4~8に示したものである(写真6-4~8)。図11-4は頁岩(Shale)製の石鏃(破損品)で、計測値は長さ3.1cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gである(写真6-4)。図11-5は頁岩製のスクレーパー(破損品)で、計測値は長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.5gである(写真6-5)。図11-6は頁岩製の石錐で、計測値は長さ3.6cm、幅3.4cm、厚さ0.7cm、重さ3.7gである(写真6-6)。図11-7は安山岩質玄武岩(Andesitic Basalt)製のナイフ(破損品)で、計測値は長さ14.8cm、幅4.6cm、厚さ1.8cm、重さ123.3gである(写真6-7)。図11-8は安山岩製(Andesite)の石斧(破損品)で、計測値は長さ7.2cm、幅4.0cm、厚さ1.8cm、重さ131gである(写真6-8)。

(2) 国後島の遺跡調査

国後島の自然環境については、右代・鈴木ほか(2011)で報告しているので、ここでは省略する。現在、国後島は古釜布を中心にロシア人約6,000人が居住し、サハリン州南クリル地区行政府がおかれ、国後島と色丹島、歯

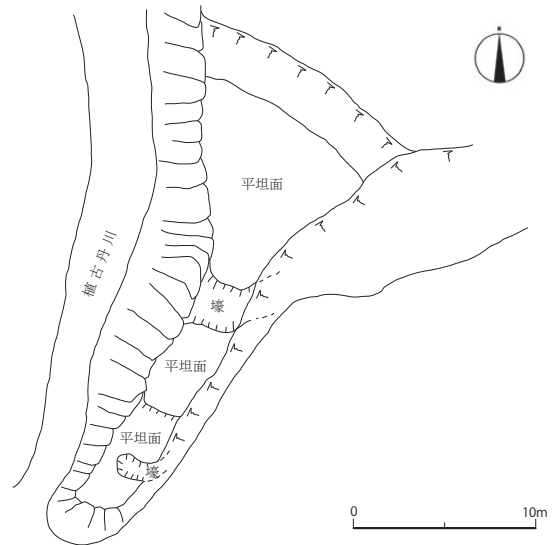


図4 国後島植古丹チャシ(簡易測量)

舞群島が管轄下におかれている。国後島では、ロシア人が在住する古釜布、泊地域以外は、自然保護地区に指定されている。このことから遺跡は保存状態が良く、発見されていない遺跡も多く存在する。しかしながら、ここ数年に択捉島と同様、2007年(平成19)より新クリル発展計画で文化施設や住宅、インフラの整備が進められ、学校、幼稚園、病院、文化会館(図書館、体育館、映画・コンサートホールなど総合的な施設)、プールが新築されている。現在、古釜布郷土博物館は閉館し、2年後の新設に向け整備を進めている。また、インフラの整備では、道路、港湾、空港などの産業基盤の整備が進んでいる。この5年のなかで新クリル発展計画にともない、古釜布や泊の周辺では、自然環境や遺跡が破壊されたものも多くみられる。

本調査は、国後島古釜布郷土博物館スコヴァティツィーナ、V. M.館長と南クリル地区行政府グルシコーヴァ、G. U.文化課長と共同で、国後島の太平洋側の中部地域で実施した(図3、図6、表2・3)。

①植古丹チャシ

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約60~80mの台地上に位置し、遺跡は植古丹川で切られる海岸段丘の左岸にある(図3-72、表3-72、写真2-1)。遺跡の位置は、北緯44°06'45"、東経145°53'56"である。ここでは、塚2カ所、テラス状平坦面2カ所と平坦面1カ所を確認した(図4)。塚の規模は、先端から幅1.5m、深さ0.5mで、次は幅2.5m、深さ1.5mである。テラス状平坦面は、先端から約16.5㎡、次は約12.5㎡、奥は約60㎡である。また、奥の平坦面の山側には高さ約1mの段が造られている。

アイヌ文化の典型的なチャシコツであり、河川に浸食された海岸段丘が突出した台地となった自然地形を利用し

表2 国後島の遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文章創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホツク文化	擦文文化			
1	新場川河口遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	続縄文土器、オホツク式土器、突起付磨製石斧、ナイフ	2006年調査
2	オタベツ遺跡								○	○	○	遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホツク式土器、トビニタイ土器	2006年調査
3	ボドソプヌィ川河口遺跡								○	○		遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホツク式土器	2006年調査
4	安渡移矢岬遺跡								○			遺物包蔵地	靴形石器、ナイフ、スクレーパー、ドリル	2006年調査
5	シラスカドマリ遺跡											竪穴住居址		
6	チノミノチ遺跡(チャシ)											竪穴住居址		
7	留夜別村ウエンチャシ										○	チャシ		
8	ウエンナイ遺跡											竪穴住居址		
9	近布内遺跡								○	○	○	遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
10	古釜布砂丘遺跡(古釜布アイヌ地)		○			○	○	○	○	○	○	竪穴住居址	幣舞式土器、三日月形石器	2006、2010、2011、2012、2015年調査
												竪穴住居址	興津式土器、石匙	
												墓	後北C ₂ ・D式土器、石匙、石槍、石鏃(無柄)、ガラス玉、人骨	
												竪穴住居址	オホツク式土器	
												竪穴住居址	ガラス玉、小玉(ジャスパー製)	
												貝塚	オホツク式土器、有角石斧、ガラス製玉	
11	古釜布湖岸遺跡(古釜布湖付近)									○		遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホツク式土器、ナイフ、擦切磨製石斧、突起付磨製石斧、磨製石斧	
12	古釜布大崎遺跡											竪穴住居址	オホツク式土器	2012年調査
13	古釜布市街地周辺	○									○	遺物包蔵地	有茎先頭器、宋銭(景德元宝)、鉄鍋、人骨	
14	古釜布小学校校庭遺跡									○		竪穴住居址	蔵手刀(?)	
15	ボンキナシリ遺跡										○	竪穴住居址	オホツク式土器	
16	ボックチャシ										○	遺物包蔵地	オホツク式土器、トビニタイ土器	
17	ボック岬遺跡										○	チャシ(塚)		
18	東沸湖畔遺跡									○		竪穴住居址	土器、石器、骨	
19	東沸湖岸遺跡(東沸川岸遺跡)								○	○	○	遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器	
20	東沸川河口遺跡(東沸遺跡)					○		○	○	○	○	竪穴住居址	縄文晩期土器	2006年調査
												竪穴住居址	後北式土器	
												竪穴住居址	オホツク式土器	
												遺物包蔵地	続縄文土器、後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石槍、靴形石器	
21	東沸墓址(遺跡)										○	墓	墓標	
22	東沸湖フシ岬チャシ										○	チャシ(2重の塚)		
23	東沸湖チャランケウシ遺跡										○	竪穴住居址		
24	東沸湖チャランケウシチャシ										○	遺物包蔵地	煙管	
25	東沸川南方のチャシ										○	チャシ(土壘)		
26	シロマンベツ川左岸遺跡							○				チャシ(土壘)		
27	ウエンナイ遺跡											遺物包蔵地	幣舞式土器	2006年調査
28	泊川河口遺跡(泊遺跡)					○		○	○	○		竪穴住居址		2007年調査
29	泊村警察署遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	北筒式土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホツク式土器、石鏃、ナイフ、ドリル、突起付磨製石斧	
30	エカンコタン遺跡								○	○		遺物包蔵地	突起付磨製石斧	
31	ゼンベコタンチャシ										○	遺物包蔵地	続縄文土器、オホツク式土器	2010年調査
32	センチャシ(セン砦址)										○	チャシ(2重の塚)		
33	ゼンベコタン遺跡										○	チャシ(2重の塚)		
34	米戸賀村ムシチャシ										○	遺物包蔵地	煙管	
35	ソウスベツ川河口遺跡(ソウスベツ川)										○	チャシ		
36	米戸賀村カムイチセチャシ										○	墓	石鏃、人骨、銅銭(穿孔あり)	
37	古丹消遺跡								○	○	○	遺物包蔵地	寛永通宝	
38	小田富遺跡								○	○	○	竪穴住居址	オホツク式土器	2006年調査
39	小田富チャシ										○	遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホツク式土器、擦文土器、石斧、石器	
40	秩別ローソク岩遺跡											竪穴住居址	土器片、銅銭(穿孔あり)、木炭、灰、焼土	
												墓	太刀、鐔、装飾品(銀製)、銅銭(穿孔あり)、石鏃	
												遺物包蔵地	幣舞式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホツク式土器	
												竪穴住居址(方形、3カ所)		
												チャシ(2重の塚)		
												遺物包蔵地	人骨	

表3 国後島の遺跡一覧（2）

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文章創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホツク文化	擦文文化			
41	秩苅別チャシ										○	チャシ		
42	秩苅別遺跡特別教授場ブランド遺跡										○	遺物包蔵地	土器片、太刀、鏝、人骨、銅銭（清の光緒帝（徳宗）32年、1906年）	
43	秩苅別アイヌの山遺跡											竪穴住居址		
44	秩苅別花見の丘遺跡											竪穴住居址		
45	秩苅別川左岸遺跡									○		竪穴住居址	後北C ₂ ・D式土器	2009、2011年調査
46	秩苅別川河口左岸遺跡									○		遺物包蔵地	オホツク式土器	2009、2011年調査
47	フシココタン川河口遺跡											竪穴住居址		（フシココタン川付近）
48	温泉の沢遺跡										○	竪穴住居址（方形と円形、計3カ所） 遺物包蔵地	石鏃、黒曜石製石器、太刀	
49	ヤイタイコタン遺跡									○	○	遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、鈴谷式土器、オホツク式土器	2006年調査
50	ニキショロ海岸遺跡									○	○	竪穴住居址 遺物包蔵地	縄文晩期土器群、石製小玉、有柄石鏃 宇津内式土器、下田ノ沢式土器	
51	アリゲル湖岸遺跡（ニキショロシブチャリ川付近）								○	○	○	竪穴住居址 遺物包蔵地	縄文晩期土器、石匙、炭、 縄文晩期土器群、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石匙、有柄石鏃、無柄石鏃	2006、2010年調査
52	ニキショロ湖岸遺跡（ニキショロ湖付近）								○	○	○	竪穴住居址 石塚 遺物包蔵地	オホツク式土器 有柄石鏃（緑が鋸歯状、赤褐色）、石鏃（黒曜石製） 縄文晩期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、擦文土器、トビニタイ土器、ドリル、スクレーパー、石鏃、石槍、突起付磨製石斧	2006年調査
53	ニキショロ湖金比羅山遺跡（チャシ）									○	○	竪穴住居址 チャシ（2重の壕）	オホツク式土器 太刀	2012年調査
54	ニキショロ湖沼口遺跡									○	○	貝塚 墓	オホツク式土器、鉄鍋 磐石、人骨	2010、2012年調査
55	カムイチャシ										○	チャシ		
56	トショロ遺跡											竪穴住居址		
57	シベトロ遺跡						○	○	○	○	○	遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
58	大滝村チャシ										○	チャシ		
59	マイアチヌイ川河口遺跡（地点不明）											遺物包蔵地	ドリル、ナイフ	2006年調査
60	スベノイマイアチヌイ川河口遺跡（地点不明）							○		○	○	遺物包蔵地	縄文後期土器、後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
61	ニキショロ湖沼口砂丘遺跡									○		竪穴住居址、貝塚		2012年調査
62	ニキショロ湖西岸遺跡										○	竪穴住居址		2010年調査
63	古釜布沼南岸遺跡											遺物包蔵地	剥片（黒曜石）	2010年調査
64	シロマンベツ川河口左岸遺跡										○	遺物包蔵地	オホツク式土器	2011年調査
65	シロマンベツ川河口右岸台地遺跡			○						○		遺物包蔵地	石刃鏃、つまみ付きナイフ、続縄文土器	2011年調査
66	チクニ川右岸台地遺跡											竪穴住居址（円形1）		2015年調査、縄文
67	チクニ川左岸台地遺跡											竪穴住居址（円形1）		2015年調査、縄文
68	オボロセ台地1遺跡										○	竪穴住居址（方形1）		2015年調査
69	オボロセ台地2遺跡											竪穴住居址（円形3）		2015年調査、縄文
70	オボロセ台地3遺跡											竪穴住居址（円形1）		2015年調査、縄文
71	代々別川右岸台地遺跡									○	○	竪穴住居址（円形7、フライパン形3、方形2）	下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、石器類	2015年調査、縄文
72	植古丹チャシ										○	チャシ（壕）		2016年調査
73	植古丹段丘遺跡										○	竪穴住居址（円形1）		2016年調査、縄文
74	キナカイ川左岸遺跡									○		竪穴住居址（円形3）		2016年調査
75	キナカイ川右岸砂丘遺跡									○		竪穴住居址（方形1）		2016年調査
76	古釜布大岬東海岸岩面刻画											線刻画		2016年調査、明治～昭和
77	東沸川左岸1遺跡									○	○	竪穴住居址（方形15）	後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、石器類	2016年調査
78	東沸川左岸2遺跡									○	○	竪穴住居址（円形42、フライパン形14、六角形2、方形12）	下田ノ沢式土器、剥片（黒曜石）	2016年調査
79	ウラロクシベツ遺跡										○	竪穴住居址（方形4）		2016年調査
80	ヤイタイコタン2遺跡									○		竪穴住居址（六角形1）		2016年調査

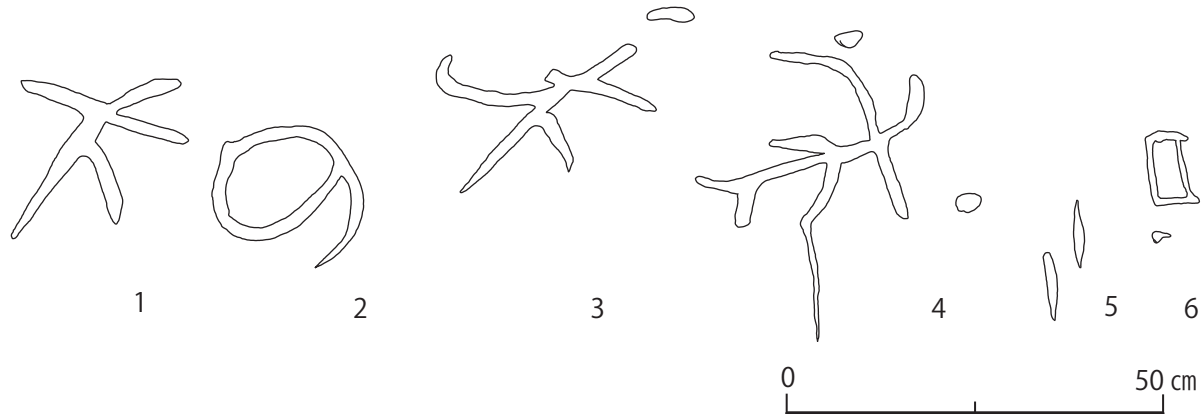


図5 国後島古釜布大岬東海岸の岩面刻画

た丘先式のチャシある。遺物は、採集できなかった。時期は遺構の状況から、アイヌ文化の時期に位置づけられる。

②植古丹段丘遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約25～30mの海岸段丘上に位置し、植古丹川の右岸にある（図3-73、表3-73、写真2-2）。遺跡の位置は、北緯44°06'38"、東経145°53'52"である。ここでは、竪穴住居址1軒を確認した。竪穴住居址の形状は六角形で、規模は8m×7m、深さは約1mである。時期については竪穴住居址の形状からオホーツク文化の時期と考えられる。遺物は、採集できなかった。遺跡の性格は、集落址である。

③キナカイ川左岸遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約10～11mの河岸段丘上に位置し、遺跡はキナカイ川の左岸にある（図3-74、表3-74、写真2-3）。遺跡の位置は、北緯44°05'49"、東経145°53'31"である。ここでは、竪穴住居址3軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形で、規模は径約7～6m、深さは約0.7～0.4mである。時期は竪穴住居址の形状と立地環境から続縄文文化の時期と考えられる。遺物は、採集できなかった。遺跡の性格は、集落址である。

④キナカイ川右岸砂丘遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する標高約5～4mの砂丘上に位置し、遺跡はキナカイ川の河口右岸にある（図3-75、表3-75、写真2-4）。遺跡の位置は、北緯44°05'39"、東経145°53'21"である。ここでは、竪穴住居址1軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形で、規模は径約8m、深さは約0.4mである。遺跡の時期は、竪穴住居址の形状と立地環境から続縄文文化の時期と考えられる。遺物は、採集できなかった。遺跡の性格は、集落址である。

⑤古釜布大岬東海岸岩面刻画

2015年の北方四島専門家学術交流において、サハリ

ン州郷土博物館のヴィジネフスキー、N. V. 館長から、この岩面刻画の共同研究の提案があったものである。

この岩面刻画は、国後島中部、太平洋側の古釜布に発達する海岸段丘の下に安産岩（Andesite）の巨礫で構成する海岸の標高約1～2mに位置している（図3-76、表3-76、写真3-1～2）。岩面刻画の位置は、北緯44°01'45"、東経145°51'58"である。この地点で、高さ2.5m、幅2.4m、厚さ3mの安産岩の巨礫に刻線された岩面刻画を確認した。

刻線は、図5-1～6で示すように6のパターンがある（図5、写真3）。図5-1は幅約14cmの「大」の字状のもので、刻線の幅は約1cm、深さは約0.7cmで、断面が「V」字状になっている（写真3-3）。図5-2は幅約13cmの「の」の字状のもので、刻線の幅は約1cm、深さは約0.7cmで、断面が「V」字状になっている（写真3-3）。図5-3は幅約20cm、高さ約30cmのもので、刻線の幅は約1～0.7cm、深さは約0.7cmで、断面が「V」字状になっている（写真3-4）。図5-4は幅約43cm、高さ約46cmのもので、刻線の幅は約1～0.7cm、深さは約0.7cmで、断面が「V」字状になっている（写真3-4）。図5-5は幅約1cm、高さ約9cmの二つの刻線からなっている（写真3-5）。刻線の幅は約1cm、深さは約0.7cmで、断面が「V」字状である。図5-6は幅約5cm、高さ約8cmの長方形状のもので、右側の二角の刻線が飛び出ている（写真3-5）。刻線の幅は約0.7～0.5cm、深さは約0.7cmで、断面が「V」字状になっている。

刻線で表現している具体的なものは断定できないが、鉄製の道具を使用して刻線で描かれていることは判断できる。また、周辺の巨岩には、ロシア語で国後島上陸の記念で記されたものや落書き的なものも存在する。写真3-6は、キリル文字でЗ.Н.Г.と名前のイニシャルと1931年と1952年4月24日と年月日が記されている。これらも同様に鉄製の道具で刻線されている。この事例や刻線の観察から先史文化の時期ではなく、明治～昭和の

ころに描かれたものと推察できる。ここで発見された刻線は、見方では日本の文字的なものや模様のものがあるが、広い意味を持たせここでは岩面刻画として扱うこととした。今後の調査課題とし、類例の発見を期待することとする。

⑥東沸川左岸1遺跡

この遺跡は、国後島中部、東沸湖から太平洋側に流れる東沸川の河岸段丘、標高約5~7mの台地上に位置し、東沸川の南東側左岸に接している(図3-77、図6、表3-77、写真2-5)。遺跡の位置は、北緯43°54'31"、東経145°38'43"である。また、標高4~5mになると湿地が広がり遺跡の確認はできない。ここでは、竪穴住居址15軒を確認した(図6)。竪穴住居址の形状は、全て方形である。竪穴住居址の規模は、約10~7.5m、深さは約1mである。また、河川蛇行部の浸食で遺跡の一部が崩され、その地点で土器5点、石器2点、フレイク1点の遺物を採集した。時期は、竪穴住居址の形状と立地環境、採集遺物から続縄文文化(前半)、擦文文化(晩期)の時期と考えられる。遺跡の性格は、比較的規模の大きな擦文文化の集落址である。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図12-1~4に示したものである(写真6-9~12)。図12-1~3は、続縄文文化の胴部片と底部片で、下田ノ沢2式土器である。この土器の時期は、紀元前後ころに位置づけられる(写真6-9~11)。

図12-4は、擦文土器の口縁部から胴部の土器片で、口縁部に短刻文、胴部に斜位の沈線文が施されている(写真6-12)。この特徴から擦文文化晩期に位置づけられ、12世紀ころに位置づけられる(鈴木 2006)。

2) 石器は、図12-5・6に示したものである(写真6-13・14)。図12-5は黒曜石(Obsidian)製の石鏃(破損品)で、計測値は、長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmで、重さ0.9gある(写真6-13)。図12-6は黒曜石製の石鏃(破損品)で、計測値は、長さ1.8cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.5gである(写真6-14)。

⑦東沸川左岸2遺跡

この遺跡は、国後島中部、東沸湖から太平洋側に流れる東沸川の河岸段丘、標高約5~7mの台地上に位置し、東沸川の北東側左岸に接している(図3-78、図6、表3-78、写真2-6)。遺跡の位置は、北緯43°54'33"、東経145°38'42"である。また、標高3~4mになると湿地が広がり遺跡の確認はできない。ここでは、竪穴住居址70軒を確認した(図6)。竪穴住居址の形状は、円形42軒、フライパン形14軒、六角形2軒、方形12軒である。竪穴住居址の規模は、円形で径約10~7.5m、深さは約1m、フライパン形で径約8~6.5m、深さ約1.5~1m、六角形で約12m×9m、深さ約1.5m、方形で8~7.5m、

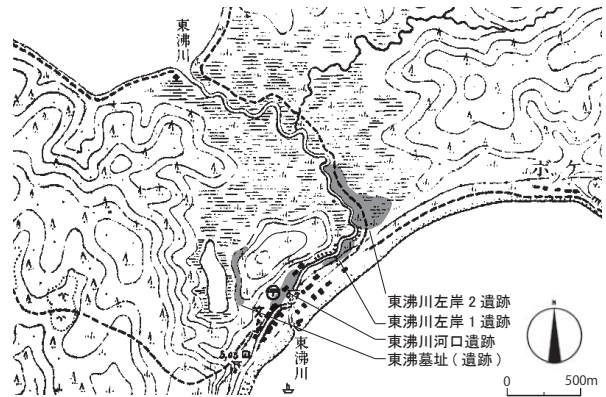


図6 国後島東沸周辺の遺跡分布

(国土地理院、数値地図50,000(地図画像)の国後島東沸の一部を使用)

深さ約1mである。また、竪穴住居址の一部が崩された地点で土器2点、フレイク2点の遺物を採集した。時期は、竪穴住居址の形状と立地環境、採集遺物から続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化の時期と考えられる。遺跡の性格は、大規模な集落址である。

採集した主な遺物は、次のとおりである。

1) 土器は、図12-7に示したものである(写真6-15)。続縄文文化の下田ノ沢2式土器の口縁部片である。この土器の時期は、続縄文文化前半の紀元前後ころに位置づけられる。

⑧ウラロクシベツ遺跡

この遺跡は、国後島中部、東沸川河口から南西に約2.5kmのウラロクシベツ川の左岸、標高約5~6mに位置している(図3-79、表3-79、写真2-7)。遺跡の位置は、北緯43°53'29"、東経145°37'32"である。また、遺跡の対岸は急峻な崖になっている。ここでは、竪穴住居址4軒を確認した。竪穴住居址の形状は、全て方形である。竪穴住居址の規模は、約6~5m、深さは約0.7mである。竪穴住居址の形状や立地環境から擦文文化の時期と考えられる。遺跡の性格は、集落址である。現在、この地域の自然環境保護の監視施設があり、河川側に遺跡がある。調査の時、ウラロクシベツ川には、サケが遡上していた。遺跡の立地環境では、良好な遺跡である。

⑨ヤイタイコタン2遺跡

この遺跡は、国後島中部、オホーツク海側の砂丘、標高約5mに位置し、中ノ川河口から0.7kmある(図3-80、表3-80、写真2-8)。遺跡の位置は、北緯44°02'11"、東経145°42'56"である。また、ここでは、竪穴住居址1軒を確認した。竪穴住居址の形状は、六角形1軒である。竪穴住居址の規模は、約8m×7m、深さ約0.7mである。時期は、竪穴住居址の形状と立地環境からオホーツク文化の時期と考えられる。遺跡の性格は、集落址である。遺物は、採集できなかった。

以上、現地調査の成果として、新しく確認した遺跡は、

縄文文化、続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化の時期であった。択捉島では、戦後初めての考古学調査でもあり、この調査で8カ所の遺跡を確認した(図1、表1)。国後島では、この調査で9カ所を新たに確認し、これまで確認した遺跡に加えると合計80カ所になる(図3、表2・3)。

特に、択捉島のナヨカの地域では、縄文時代前期の古い時期の遺跡データを新たに得ることができた。さらに、別飛では、温泉川を中心に時期ごとに遺跡の立地が明確に違うことが明らかになった。段丘上の遺跡は縄文文化中期末から初頭、続縄文文化の前半期、低位の河岸段丘の遺跡では続縄文文化前半から後半、内陸の砂丘から海岸の砂丘にかけて、オホーツク文化、トビニタイ、アイヌ文化と遺跡の時期が変遷することが明らかになった(図2)。これは、過去の環境の変化、低地における海岸線の変化が影響しているものと考えられ、時期ごとに人が住みやすい環境を選択していた証となる遺跡群である。

国後島では東沸川の左岸で擦文文化の集落、河川に沿ってやや内陸側で続縄文文化の集落が確認できたことが大きな成果である(図6)。これも、択捉島別飛の温泉川に位置する遺跡群と同様に過去の環境変化にたいし人が住みやすい環境を選択していた結果が示されている良好な遺跡である。また、植古丹チャシの発見、岩面刻画の調査も特筆する成果である(図4・5)。

3 学術交流

この学術交流は、外務省の「ビザなし交流・専門家交流事業」の研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。招聘した専門家は、国後島古釜布郷土博物館のスコヴァティツィーナ、V. M.館長(考古・民俗学)をはじめ、南クリル地区行政府のグルシコーヴァ、G. U.文化課長(郷土史)、サハリン州の地域生年軍事愛国社会基金のツィガノフ、A. B.スミムイニ支部長(戦争史、考古学)が加わり共同調査を実施した。この共同調査は、北海道と四島の専門家の博物館交流として実施しているもので、専門家の要望もあり、共通の課題として北海道南部の歴史・文化と史跡保存、災害復興と観光をテーマに現地調査を行うこととした。

学術的な交流の目的は、第一に北海道の歴史・文化がどのように認識されているか、第二に史跡がどのように保存され活用されているか、第三に北海道内の博物館がどのような方法で持続可能な管理・運営をおこなっているかである。

この調査は2016年(平成28)10月10日～10月15日の6日間であり、北海道南部の博物館や史跡、文化施設

などの調査を実施した。共同調査のテーマとして、第一に北海道南部の歴史・文化、第二に災害復興と観光であり、次の調査を実施した。

(1) 北海道南部の歴史・文化

このテーマでは、北の縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた活動状況、北海道南部の歴史・文化の活用状況と史跡整備について現状を把握することを目的とし、博物館が地域に果たす役割について検討する機会とした。

①北の縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた活動

ここでは、函館市縄文文化交流センター、国指定史跡「大船遺跡」、国指定史跡「垣ノ島遺跡」、国指定史跡「入江・高砂貝塚」を訪問して調査を行った。

この世界遺産登録に向けた取組は、北海道だけではなく青森、秋田、岩手の3県を含めた広域のものであり、特に「北の縄文道民会議」や様々な市民レベルでの登録に向けた活動について関心をもち縄文文化の価値や重要性について調査を行った。また、世界遺産登録に関連する史跡の保護、史跡の復元などの現状について調査を行った。

函館市縄文文化交流センターでは、展示の技術、照明、パネルや写真、標本などの演出、展示環境を重点的に調査した。特に国宝「中空土偶」の特殊な展示や環境、展示ケースの仕様を調査した。虻田町の入江・高砂貝塚ではガイダンス施設と野外の史跡運営や保存、竪穴住居の復元などを調査した(写真7-5)。

この調査では、北方四島の縄文文化の重要性やその文化的価値、史跡の保存活用について共通の課題となった。

②北海道南部の歴史・文化と史跡整備

ここでは、松前町の郷土博物館、国指定史跡「松前城」、松前藩屋敷、上ノ国町の国指定史跡「勝山館」、重要文化財「旧笹浪家住宅」、江差町の江差追分会館、開陽丸青少年センター、檜山爾志郡役所(郷土資料館)を調査した。

北海道の歴史認識として、専門家より松前藩成立以前と以後の歴史を調査することが求められ、さらに地域の文化遺産として継承されている神楽などの民俗芸能、当時のアイヌ文化について調査を行った。さらに、地域博物館の役割と国指定史跡の整備と活用、それにとまうガイダンス施設の管理・運営について調査した。特に、松前、上ノ国、江差と北方四島の歴史的なつながりを各博物館の展示をつうじ認識を深める絶好の機会となった。

松前町の歴史・文化の具体的な調査内容は、松前藩の歴史やそれにまつわる甲冑や刀などの資料、「七社祭礼」の江戸時代の祭礼行事や山車、松前城下の庶民生活と道具、北前船がはたした商業経済、アイヌ民族との交易、クナシリメナシの戦い、アイヌの民族資料などである

(写真7-1・2)。

上ノ国町の歴史・文化の具体的な調査内容は、勝山館が築造された歴史的経緯、道南十二館との関係、交易の状況、夷王山墳墓群の埋葬法、これまでの史跡整備の状況、勝山館ガイダンス施設と旧笹浪家住宅の運営・管理などである(写真7-3)。

江差町の歴史・文化の具体的な調査内容は、姥神大神宮渡御祭とその13台の山車など伝統文化、江差追分の継承活動、箱館戦争と開陽丸、開陽丸の発掘方法、歴史的建造物の博物館利用などである。

また、根室市では、(公財)北海道埋蔵文化財センターが発掘調査している別当賀1番沢川遺跡を視察した(写真7-6)。縄文時代中期末から後期初頭の時期で、北方四島にも同様な縄文文化が広がっている。

(2) 災害復興と観光

ここでは、洞爺湖・有珠山を中心とするユネスコ世界ジオパークの整備状況と災害後の復興について調査した。北方四島では、1994年(平成6)10月に発生した「北海道東方沖地震」の震源が近かった色丹島が一番の被害を受けている。極東一であった水産コンビナートや文化会館は半壊、学校や住宅が全壊する大きな被害があった。国後島や択捉島でも津波で住宅が流された地域もあり、択捉島の軍事病院が全壊し死者もでていた。この調査の背景には北方四島と共通する課題があり、洞爺・有珠ユネスコ世界ジオパークでは、1977年(昭和52)火山遺構公園、洞爺湖火山科学館、洞爺湖ビジターセンター、洞爺湖森林博物館、昭和新山、有珠山を調査した(写真7-4)。

さらに、有珠山や昭和新山の噴火歴史と災害復興を進めた環境整備について調査を行った。特に、火山噴火と災害の教育、観光事業への活用について、現地でその状況を確認しながら調査を行った。また、豊かな自然環境と災害を観光と結びつけ運営していることに興味を示しながら調査を行った。北方四島の専門家は、文化・観光資源の開発に結びつけることが可能であるとの考えをもった。特に、この世界ジオパークを訪れる観光客の多さに驚きを示していた。

このように、今回の学術交流により北海道の歴史認識を深め、史跡や遺跡、各博物館の活動の情報をえたことは北方四島での歴史・文化資源の活用につながる重要なことであった。共同調査を行った専門家は、この学術交流の重要性を実感する機会となった。また、北海道の世界遺産への登録活動と史跡整備や洞爺・有珠のユネスコ世界ジオパークの活動、博物館の展示や運営、活動、文化財保護思想などの情報は、国後島で新設する博物館のありかたを検討する要素となった。

このように北方四島の専門家との共同調査が、北方領土問題を越えた共通の歴史・文化の発展につながるとともに、今後も両地域の共通の課題を解決するため歴史・文化の学術交流は重要であること認識したことは大きな成果である。

4 おわりに

これまで、2016年(平成28)に実施した本研究の成果と学術交流の概要について示してきた。今年度は、択捉島と国後島の考古学的調査、学術交流として専門家を招聘し、北海道南部の博物館や史跡を中心に調査を実施した。この研究成果は、択捉島中部オホーツク海側で8カ所、国後島中部地域で8カ所の遺跡を新たに確認し、これに加え古釜布の大岬東海岸で発見された岩面刻画を調査した。これらの遺跡は時期や環境の変化に対応しながら築かれていたことが明らかになった。これは、北方四島のみならず北方域の先史文化を構築する手掛かりとなる基礎データである。

しかしながら、択捉島と国後島では、2007年(平成19)からの新クリル発展計画の整備で破壊される遺跡もいくつかみられた。現在もなお継続されている可能性がある。その対応として、早急に記録だけでものこすことが大切であることを痛感した。

学術交流である専門家招聘では、継続して北方四島との共通の課題である博物館交流、史跡・文化財の保護、両地域の歴史・文化の認識など北海道内で調査を実施した。この調査では、北方領土問題を越えた歴史・文化の交流の重要性、文化遺産の大切さなど、これまでと同様に同一的な認識のもとで進めることができた。

本研究が果たす学術交流の役割と、北方四島の専門家が果たす役割については、多くの様々な課題が山積しているのが現状である。しかしながら、この学術交流ではこれまでの交流で理解できるように、課題解決にむけた理解が一層、深まってきているのも事実である。人的な学術交流はもとより、博物館交流の課題としては歴史・文化的な情報の共有化や展示活動、文化財資源の評価、文化財資源の整備・活用、収蔵資料の保存活用など、基礎的な整備が重要になってくることは間違いない。将来的には課題解決の一つとして、遺跡の地形測量、さらに発掘調査など、共同で実施できることを願っている。これは歴史・文化の解明、歴史教育の資源としても計り知れない成果が期待できる。また、発掘調査は、現地での学校教育の教材として、地域の社会教育的な資源として活用されることは確実であろう。

この研究が果たす学術交流は、このように北方四島の歴史・文化遺産の認識を深め、文化財保護活動や博物館

活動を推進することで北方領土問題の解決に大きく貢献できるものと期待している。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、北地文化研究会北構保男博士にご指導と有意義なご助言をいただいた。択捉島と国後島の現地調査では、クリル地区行政関係者の方々、南クリル地区行政関係者の方々、通訳の木村邦生氏、西田志保氏、外務省欧州局ロシア課課長補佐清水保彦氏、外務事務官本折裕氏、外務事務官山口英子氏、内閣府北方対策室、北方領土問題対策協会にご協力、ご支援をいただいた。学術交流の専門家招聘では、訪問先の函館市縄文文化交流センターの田中哲郎氏、松前町教育委員会の前田正憲氏、佐藤雄生氏、上ノ国教育委員会の塚田直哉氏、江差町教育委員会の宮原浩氏、奥山さとみ氏、虻田町教育委員会の角田隆志氏、(公財)北海道埋蔵文化財センターの広田良成氏、阿部明義氏、山中文雄氏にご指導、ご協力を得た。また、北方領土対策根室地域本部、北方領土復帰期成同盟などの機関、ならびに関係諸氏にはご協力を賜った。北海道教育大学札幌校の坂本恵衣氏には、図版作成などの協力を得た。ここに記して、感謝とお礼を申し上げるしだいである。

なお、本研究で実施している北海道内博物館・史跡などの学術交流の共同調査は、外務省「ビザなし交流・専門家交流事業」研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。また、科学研究費助成基金助成金(基盤研究(C)、課題番号25370900、研究代表者:鈴木琢也)「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」の一部を使用し実施した。

引用・参考文献

- 鈴木琢也 2006. 擦文土器からみた北海道と東北地方北部の文化交流. 北方島文化研究 4: 19-42.
 鈴木琢也 2011. 北日本における古代末期の交易ルート. 古代中世の蝦夷世界. pp. 101-118. 高志書院.
 鈴木琢也 2016a. 平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容. 歴史評論 795: 16-27.
 鈴木琢也 2016b. 北海道地域の動態—交流・交易を中心として—. 日本考古学協会2016 年度弘前大会「北東北9・10 世

- 紀社会の変動」研究発表資料集. pp. 107-122. 日本考古学協会.
 右代啓視 1982. 動物意匠を施した注口・把手付のオホーツク土器. 北海道史研究 30: 52-54.
 右代啓視 1991. オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究年報 19: 23-52.
 右代啓視・手塚 薫 1991. ウルップ島アリュートカ湾岸出土の遺物. 北の歴史・文化交流研究事業中間報告. pp. 79-86. 北海道開拓記念館.
 右代啓視 1996. 千島列島採集の考古資料—長尾又六コレクション—. 根室市博物館開設準備室紀要 10: 71-90.
 右代啓視 2014a. 北方四島の考古学的研究. 中華文明の考古学. pp. 409-424. 同成社.
 右代啓視 2014b. 新・千島紀行—発見された千島列島の先史文化—. 函館市北方民族資料館. 函館市文化・スポーツ振興財団.
 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2008. 国後島の遺跡—古釜布郷土博物館所蔵資料調査より—. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—2005-2007年度調査報告—. pp. 161-182. 北海道開拓記念館.
 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一 2010. 国後島における先史文化の資源利用. 北方の資源をめぐる先住民と移住者の近現代史. 北方文化共同研究報告. pp. 125-140. 北海道開拓記念館.
 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2011. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅰ). 北海道開拓記念館研究紀要 39: 99-110.
 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2012. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅱ). 北海道開拓記念館研究紀要 40: 143-154.
 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高島孝宗・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2013. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅲ). 北海道開拓記念館研究紀要 41: 59-82.
 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2014. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅳ). 北海道開拓記念館研究紀要 42: 97-126.
 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2015. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅴ). 北海道開拓記念館研究紀要 43: 37-66.
 右代啓視・鈴木琢也・竹原弘展・スコヴァティツィーナ, V. M. 2016. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究(Ⅰ)—特に北方四島の先史文化研究を中心に—. 北海道博物館研究紀要 1: 53-72.

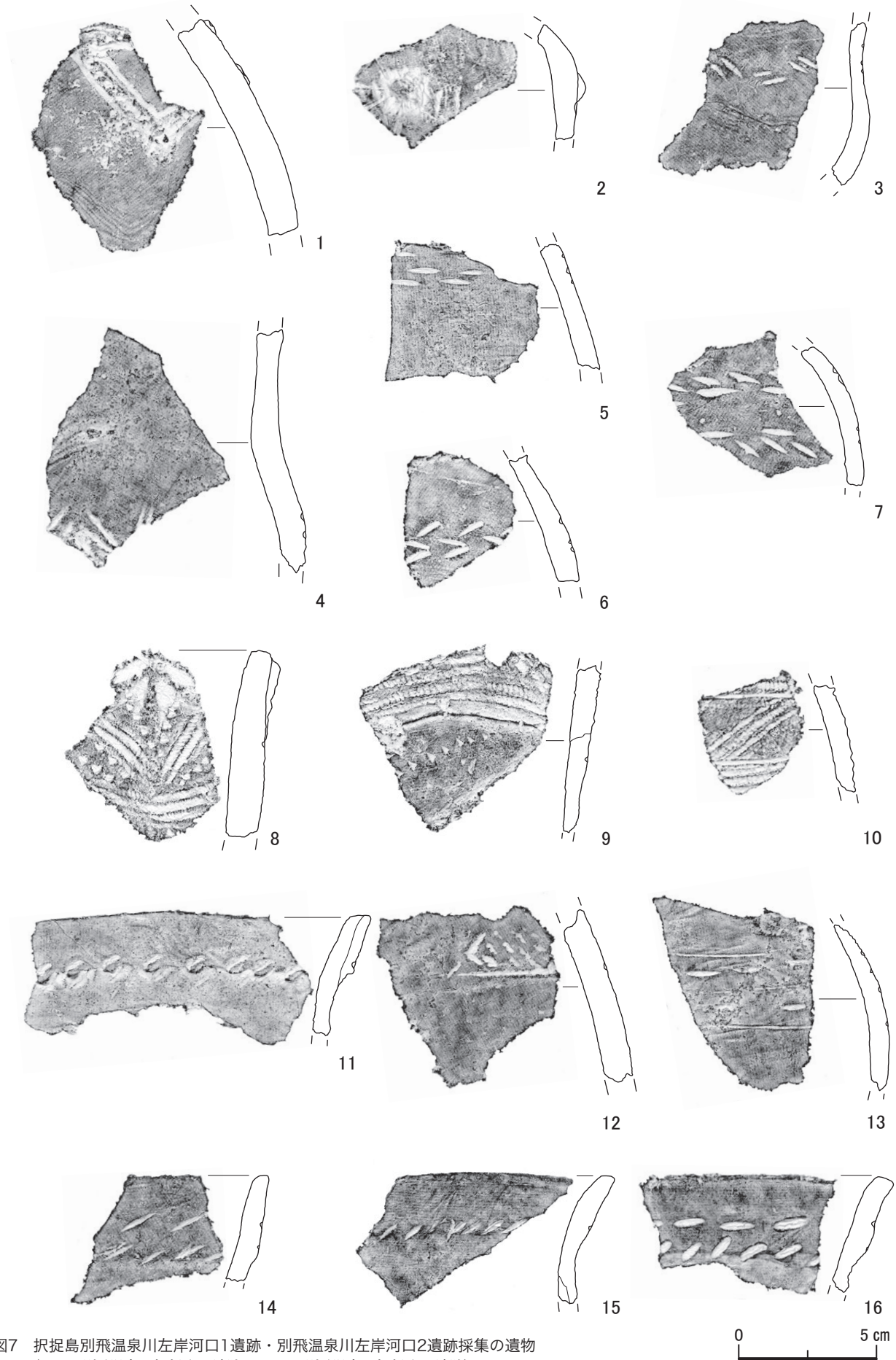


図7 択捉島別飛温泉川左岸河口1遺跡・別飛温泉川左岸河口2遺跡採集の遺物
(1～7: 別飛温泉川左岸河口1遺跡、8～16: 別飛温泉川左岸河口2遺跡)

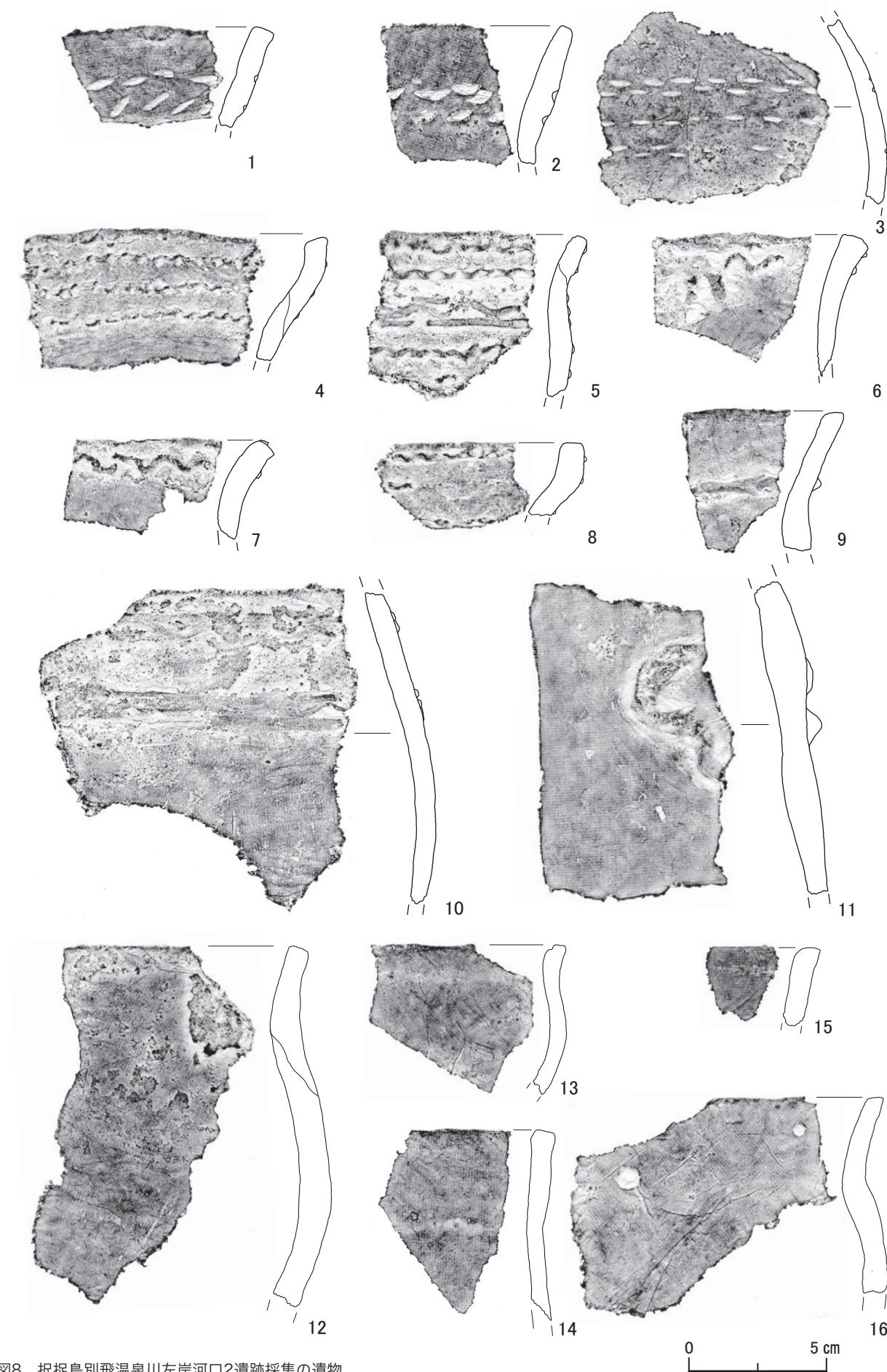


図8 択捉島別飛温泉川左岸河口2遺跡採集の遺物

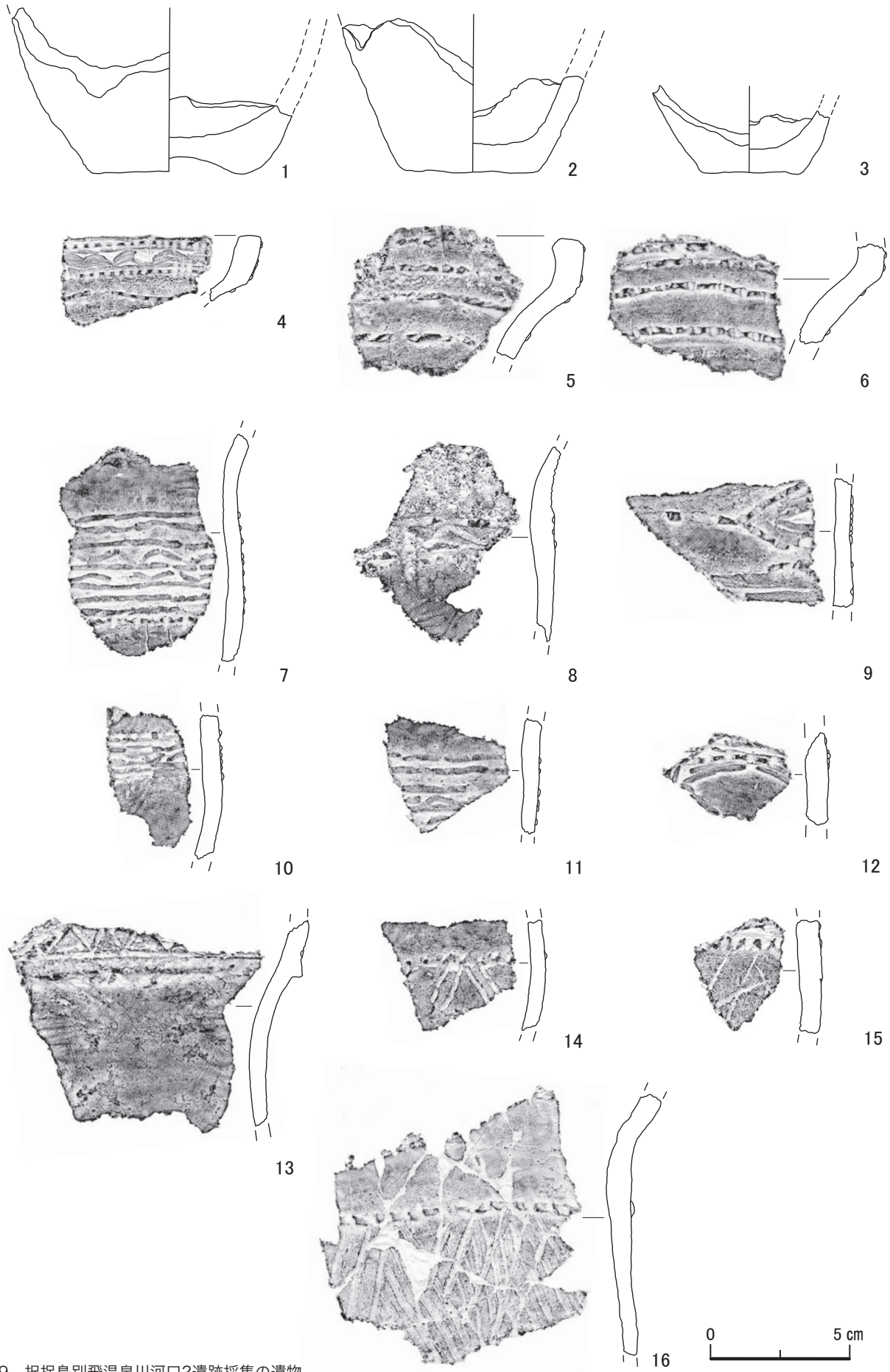


図9 択捉島別飛温泉川河口2遺跡採集の遺物

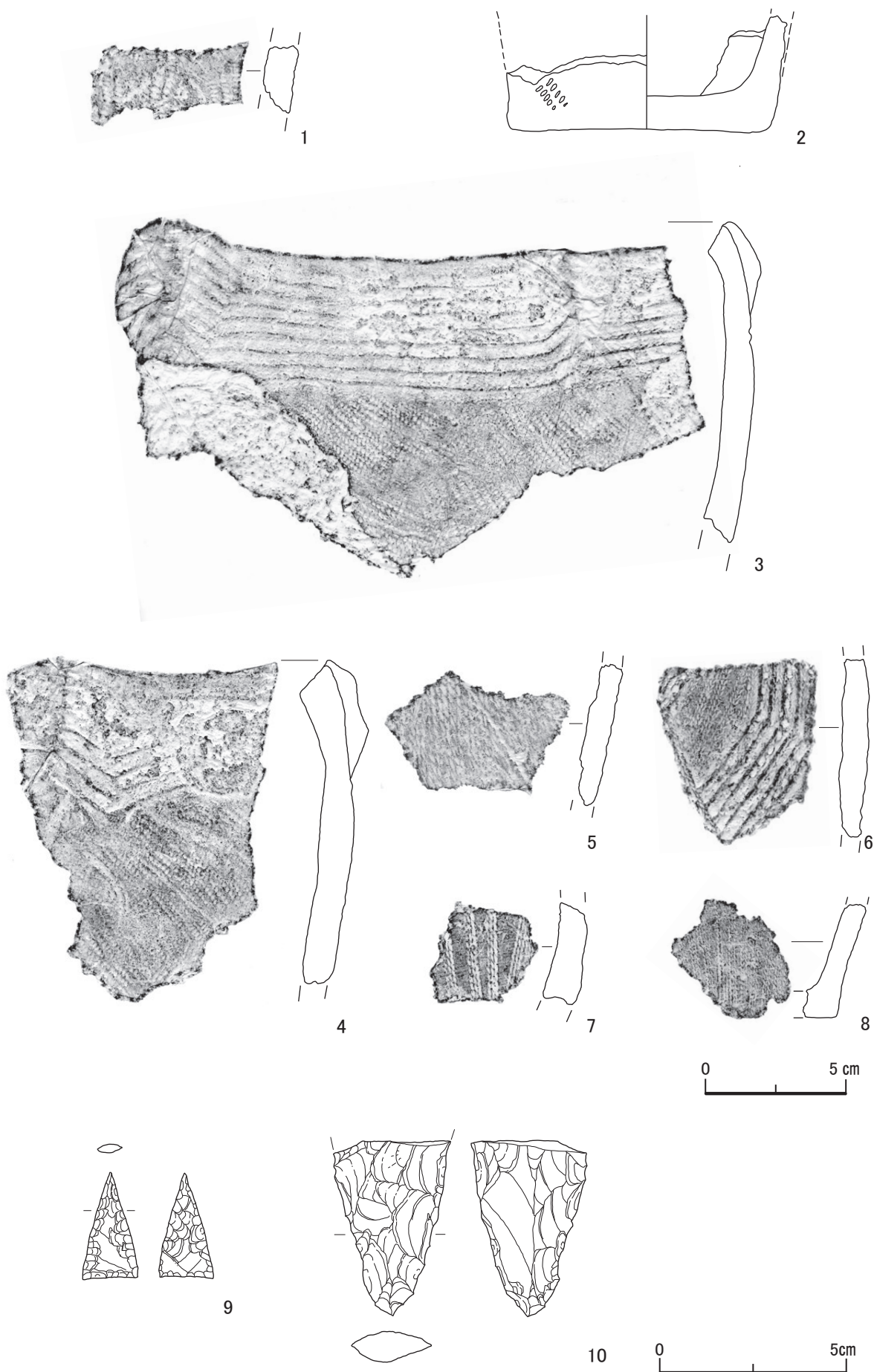


図10 択捉島別飛温泉川左岸段丘遺跡採集の遺物

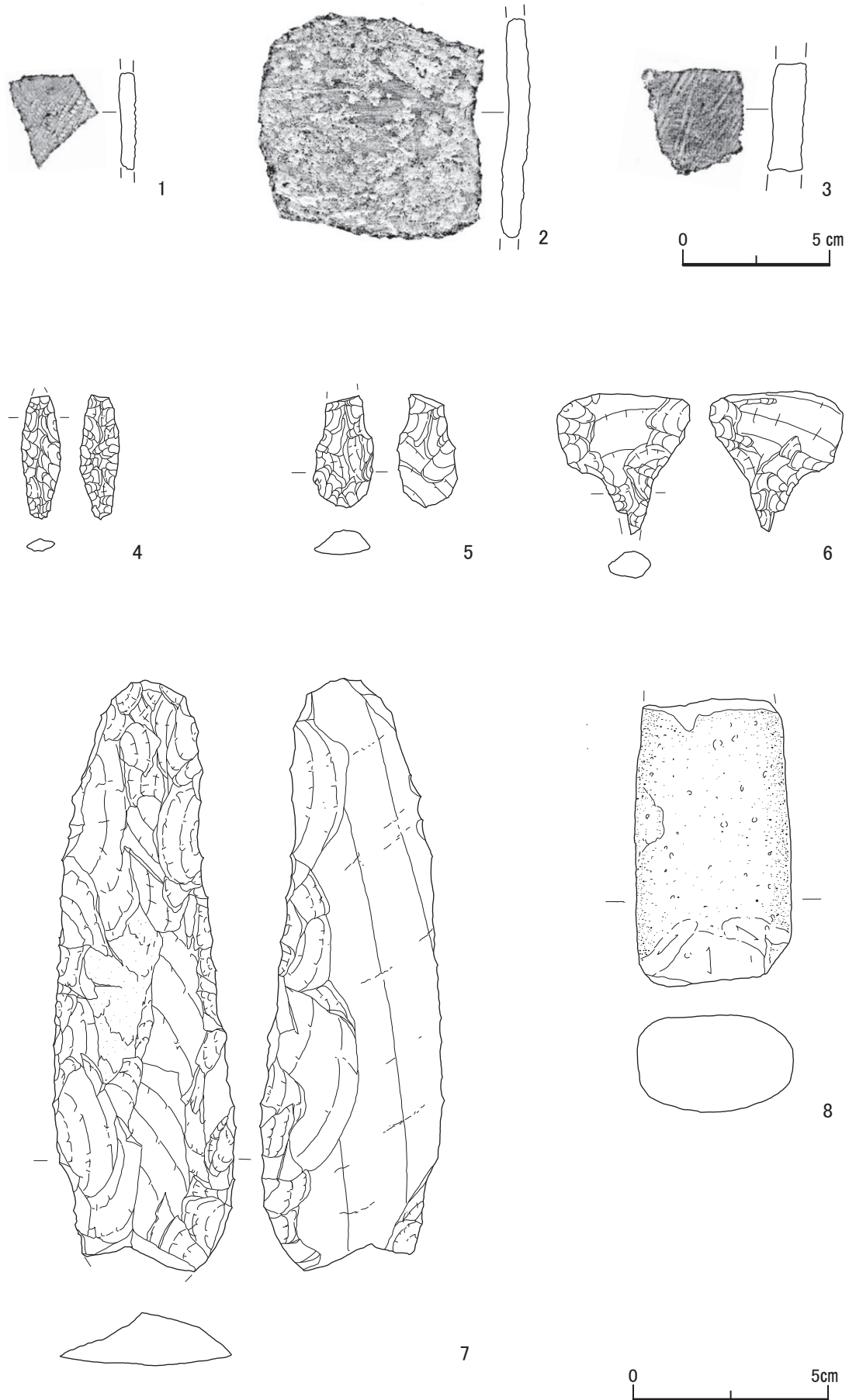


図11 択捉島ヤンケトウ1遺跡・ヤンケトウ2遺跡採集の遺物
(1：ヤンケトウ1遺跡、2～8：ヤンケトウ2遺跡)

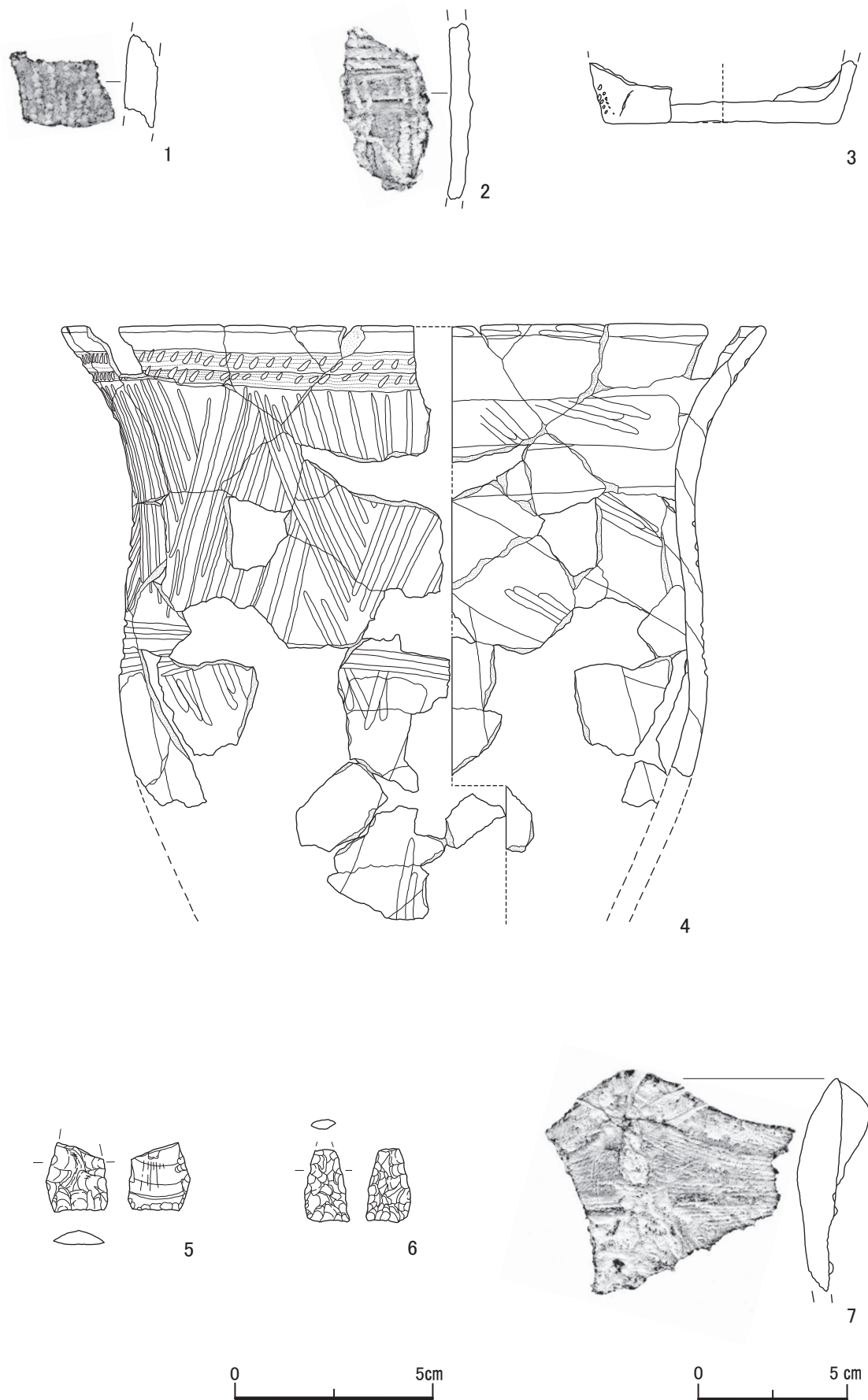


図12 国後島東沸川左岸1遺跡・東沸川左岸2遺跡採集の遺物
(1～6：東沸川左岸1遺跡、7：東沸川左岸2遺跡)



1 別飛温泉川左岸河口1遺跡



2 別飛温泉川左岸河口2遺跡



3 別飛温泉川左岸竪穴群遺跡



4 別飛温泉川左岸段丘遺跡



5 別飛温泉川右岸遺跡



6 別飛砂丘遺跡



7 ヤンケトウ1遺跡



8 ヤンケトウ2遺跡

写真1 択捉島調査遺跡



1 植古丹チャシ



2 植古丹段丘遺跡



3 キナカイ川左岸遺跡



4 キナカイ川右岸砂丘遺跡



5 東沸川左岸1遺跡



6 東沸川左岸2遺跡



7 ウラロクシベツ遺跡



8 ヤイタイコタン2遺跡

写真2 国後島調査遺跡



1 岩面刻画調査状況



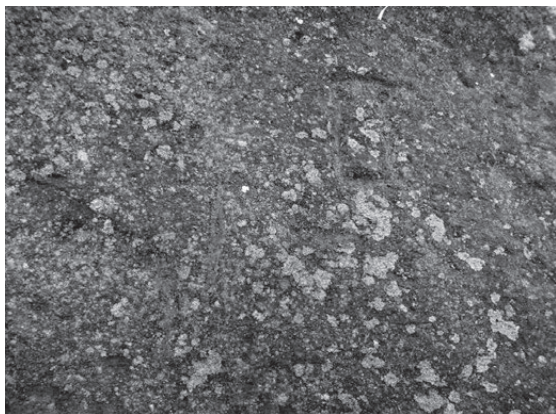
2 岩面刻画全景



3 岩面刻画（1・2）



4 岩面刻画（3・4）



5 岩面刻画（5・6）



6 岩面に記されたキリル文字

写真3 国後島古釜布大岬東海岸岩面刻画



写真4 択捉島別飛温泉川左岸河口1遺跡・別飛温泉川左岸河口2遺跡採集の遺物
(1～7：別飛温泉川左岸河口1遺跡、8～32：別飛温泉川左岸河口2遺跡、S=1/2)



写真5 択捉島別飛温泉川左岸河口2遺跡・別飛温泉川左岸段丘遺跡採集の遺物

(1～16：別飛温泉川左岸河口2遺跡、17～26：別飛温泉川左岸段丘遺跡、1～24：S=1/2、25・26：S=2/3)

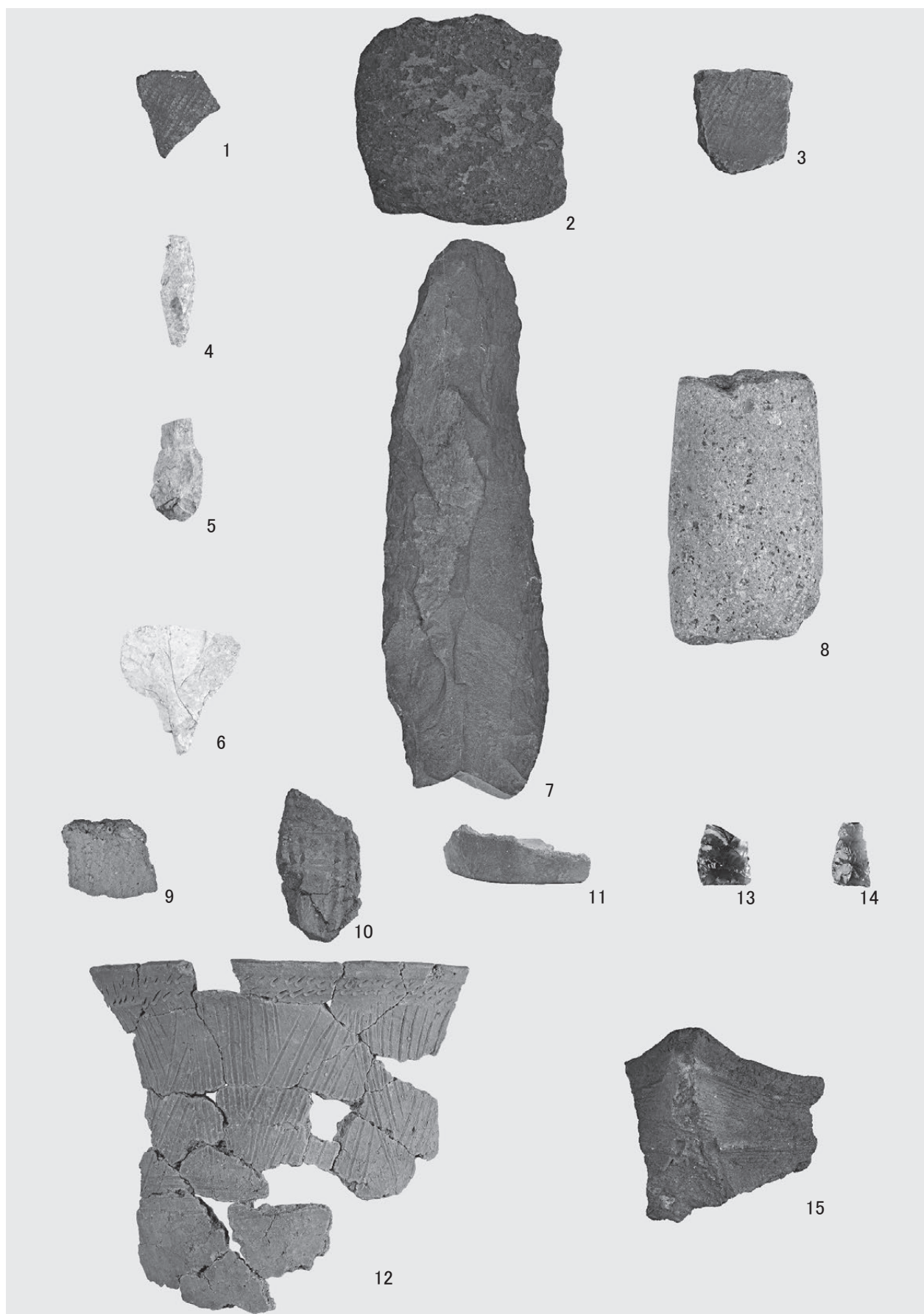


写真6 択捉島ヤンケトウ1遺跡・ヤンケトウ2遺跡・国後島東沸川左岸1遺跡・東沸川左岸2遺跡採集の遺物
(1:ヤンケトウ1遺跡、2~8:ヤンケトウ2遺跡、9~14:東沸川左岸1遺跡、15:東沸川左岸2遺跡、
1~3・9~12・15:S=1/2、4~8・13・14:S=2/3)



1 国指定史跡松前城資料館



2 国指定史跡松前城



3 国指定史跡勝山館ガイダンス施設



4 洞爺湖火山科学館



5 国指定史跡入江・高砂貝塚ガイダンス施設



6 根室市別当賀一番沢川遺跡

Comprehensive Archeological Research on the History of Human Activity on the Kuril Islands (II): With Particular Focus on the Research of Prehistoric Culture of the Four Northern Islands

Hiroshi USHIRO, Takuya SUZUKI, and V. M. SUKOVATITSYNA

The Kuril Islands, which stretch between Kamchatka and Hokkaido, is a region that lacks fundamental data – an empty domain regarding the research of the history of human activity from the Paleolithic culture to the Ainu culture. However, as far as the research of Hokkaido's prehistoric and Ainu culture is concerned, an important factor is that it is clear that like the Sakhalin route to the north, the Kuril route to the east also crossed with different cultures.

Therefore, this research – implemented from 2015 as a four-year plan – was established as a comprehensive project to accomplish new archeological research on the Northern Territories, based the results of research carried out from 2005 to 2013. In order to develop the studies carried out to date, the aim of this research was, firstly, to comprehensively clarify the Kuril Islands' history of human activ-

ity and; secondly, to build friendly relations and further deepen museum exchanges and awareness of history in both regions by developing academic exchanges.

The results for 2016 identified 17 new sites along the coastal region on the Okhotsk Sea side of Central Etorofu Island and the coastal region of the Pacific Coast side of Central Kunashiri Island from the early Jomon culture, the end of the middle to early late Jomon culture, the Zoku-Jomon cultural period, the early to late Okhotsk culture, and the last stages of Satsumon culture. Furthermore, studies of academic exchanges involved joint research on the themes of "Southern Hokkaido history and culture" and "disaster reconstruction and tourism" at community museums, historical remains and cultural facilities in Hakodate, Matsumae, Kaminokuni, Esashi, and other locations.